宗祖の三経観

――特に隠顕釈によって――

藤原幸章

一

『教行信証』六巻は、そのまま宗祖の『浄土三部経』領解の体系であるということができる。それは、この書が根本的にいわゆる三々法門の批判体系をふまえて、前五巻、顕真実の巻は専ら「真実之教・大無量寿経」により、後の顕化身土の一巻は、方便教としての『観無量寿経』、並びに『阿弥陀経』によって構成せられ、これによっていよいよ明快に「横超他力」「真宗」（化身土巻要門釈下）が確立せられていることからいっても明白である。されば「教行信証の文類」は、また「三経往生の文類」であるといいうるのであって、まことにこの書は、宗祖がその生涯をつくして「三経の光沢を蒙り」（信巻別序）つつ、そこに流れる真実の仏意を、深まりゆく自身の信心の諸段階に即して推求思念せられた、「大聖の真言」聞思の記録であるということができる。したがってここに宗祖の三経観をのべることは、必然的にこの書の全巻にわたる諸問題に及ばざるをえないこととなるのであるが、いまは特に文字通り、宗祖における三経領解の問題に重点をおくこととしたい。

ところで宗祖の三経領解の出発点に当って、決定的な方向を与えたものは、いうまでもなく法然の師教である。こ

のことは何よりも『教行信証』そのものが、ひたすら憶いを師教の恩厚に致しつつ集録せられている事実において明瞭である。しかるに師教を代表する『選択本願念仏集』は、その名のごとく選択本願論を宗要として、「往生之業念仏為本」という法然自身の根本信念を『浄土三経』の全体に確かめた、いわば法然自身の三経概論であるということができる。法然が八万四千の法蔵の中から、敢て浄土宗の正依の経典として選択決定したものは、ほかならぬ「浄土の三部経」そのものであったが(教相章)、師によれば、三経はその一つ一つが個々に分担する選択論の内容に小異はあっても(慇懃付属章の三経七選択論)、それは全面的に一致して「凡そ三経の意を案ずるに、諸行之中に、念仏を選択して、以て旨帰と為す」(同上)のであり、「三経共に念仏を選びて以て宗致と為す耳」(同上)というのである。称名念仏の一行こそ、まさしく「彼の仏の願に順」じ(「散善義」・二行章等)、「仏の本願に依る」(二行章・総結の文等)正定の業であって、すでに「弥陀如来は、余行を以て往生の本願と為したまはず、唯念仏を以て往生の本願と為しまたふ」(本願章の標章)ているからである。かくしてこの集によれば、釈迦・弥陀・諸仏に代表せられる全仏教、全経典は挙げて念仏の一行を選択して以て正定の業と決定するほかはなく、およそ念仏を離れた論議も実践も、全く意味をなさないものとせられるのであって、これを貫く論理が選択本願念仏論であり、これを支える教証が『浄土三部経』そのものであったのである。まことに法然の三経論は単一明快であって、そこでは三経個々のもつ独自の意義・性格は問われてはいない。要はただ「往生之業念仏為本」のための教証が、選択本願論を中軸としてどのように確認せられるかということ一つに焦点が定められ、ただ念仏一つが正定の業であるということが、そこに確かめられるならば足りるのであって、このための労作が『選択本願念仏集』であったのである。

かくして、ここに浄土の一宗は新しく独立し、「余行を舎てて云に念仏に帰し」(総結の文)、「自行化他、唯念仏を綜とす」(同上)る一向専修念仏門は開宗せられたのであった。在叡二十年の苦闘を背負うて必死に法然の門を叩いた、

若き求道者親鸞に対する法然の応答が、確信をこめて「ただ念仏して弥陀にたすけられまひらすべし」ということ一つをもってせられた所以はここにある。

これによってようやく二十年の長きに亘る苦眼をひらき、「雑行を棄てて本願に帰」（『教行信証』後序）した宗祖自身のすすむべき方向は、おのずから決定せられた。即ち「専修念仏」ということが、選択本願論を中軸とする師の三経解釈の結論であり、これがための『選択集』一部の体系であったとするならば、これをうける『教行信証』がその中心課題としなければならないものは、これを自身の体験実践の場にうなづきつつ、そこからもともと個々に独立し、しかも必ずしも単一とはいいえない複雑な構造をもつ、三経の一々の聖言に師教を確かめ、そこに選択本願論の徹底を期するということ、そのことにあるといわなければならない。つまり法然の三経領解が、三経は全面的に一致して念仏と諸善との行を中心とする、その選択廃立を要とするにあるものとすれば、宗祖のそれはかくしてさし示された「ただ念仏」の願心を、屈折した自身の宗教的要求に即してどのように領受し、いかに念仏選択の願心と相応するべきかということ一つに、重点がおかれざるをえなかったのである。かくしてここから展開したものが、宗祖の三経領解の方法として、夙に先学が指摘した三経差別・三経一致の二つの方法や、これに深くかかわりをもつ顕彰隠密の釈義から、さらにこれを根底的に支える三願転入の実証をふまえた三々法門の体系であるといっていいであろう。それはまさしく法然の選択本願論を中心とする三経解釈の結論をうけて、自らの求道実践に即する透徹した思念と、それに基づく師教の正当な開顕という、内外の課題を荷うものということができるであろう。

しからばそれは具体的にはどのように展開しているのであろうか。

二

宗祖の三経領解の方法として特に注目せられるものは、三経差別の見解であると考えられる。それは三経差別の名のごとく、三経の個々に、それぞれの独立した意義・性格、並びにそれのもつ宗教的役割を確認した解釈の仕方であって、それは長い浄土教の歴史において、一般に三経は無条件的に一致して「無量寿仏の荘厳功徳を説く」(『論註』上巻)とか、前記のごとく「念仏を選択して以て旨帰と為す」とのみ理解せられてきた伝統的方法を破って、敢て三経に真仮の別を推求し、これによって三経がそれぞれにもつ異った宗教的意義を確かめ、以て三経開説の仏意を思念した、最も実践的な方法であるということができる。もとよりそれは根源的には、かの三願転入の文が告げているような、宗祖自身の常に真実を求めてやまぬ、動的な宗教的精神にもとずく独創的解釈であるには相違ないけれども、実はそれこそ法然の選択廃立論が指し示している自然の方向に順じたものと考えられる。それは法然その人を真の知識と仰ぎ、ひたすら師教に随順しようと願う限り、おのずからにしてたどられるに至った、三経領解の方法であるといっていいであろう。

ところで法然教学の基調は、選択本願論にもとずく廃立為正ということ一つに貫かれているとは、上にも一言した如く、『選択集』一部に特に顕著に認められるところである。『選択集』が一すじに選択・廃立・取捨ということをもって貫き、ひたすら念仏選択の願心そのものを明らかにしてゆくところに、この書が特に「見る者論り易し」(『教行信証』後序)といわれる明快さがあり、同時に「希有最勝之華文、無上甚深之宝典」(同上)と絶讃せられる所以がある。されば選択取捨といい、廃立為正という教義表現が直接めざすところは、如来選択の願心であり、普ねく一切を摂め取る「平等の慈悲」(『選択集』本願章)そのものである。つまり廃立取捨ということは、方便を方便と知り真実を真実

と知って、一切の夾雑物を廃除して速かに選択の願心に帰し、雑行を捨てて急ぎ念仏に帰せよと示す、最も効果的な指標そのものにほかならない。それゆえにこのような廃立為正の指標に直接する宗祖の真宗は、当然のことながら「いくたびも廃立を先と」(『改邪鈔』)して、「よろづのことみなもてそらごとたわごとまことあることなし」と選び捨て、「ただ念仏のみぞまこと」と選び取るのであって、このこと一つを軸として念仏往生の信心はいよいよ純化せられ、顕浄土真実の体系は整えられてゆくのである。即ち『教行信証』六巻がこれであって、これを貫くものが真仮批判の体系としての三々法門であり、特に当面の課題についていうならば三経差別の方法である。されば宗祖の独創とみられる三経差別論も、その直接の出発点はこれを法然の選択廃立論におくものと考えられるのであって、それは法然が指し示した雑行を捨てて念仏に帰せよとの指標を、最も積極的にうけとめた三経論であるといっていいであろう。つまりそれは「往生之業念仏為本」と聞いて、そこに明示せられた能立真実としての「念仏為本」の指教を、特に弥陀の弘願を宗とする『大無量寿経』に、所廃方便としての「諸行為末」の教旨を、定散要門とする旨を『観無量寿経』に求めるのみにとどまらず、さらに自身の内面深く執拗につきまとう罪福信を反省して、これに『阿弥陀経』を位置づけたものと考えられる。いいかえるならば、法然の選択廃立ということが、諸行を廃捨して念仏を能立し、定散諸善の方便を廃して弘願の真実につくための、もっとも明快な師教であったに対して、これはまさしくこの師教をうける自らの実践の場に立って、要門から弘願へ、諸行から念仏へと雑行を棄てて本願に帰する実践過程に、ともすればしのびよる自力の執心をするどく洞察して、弘願念仏、要門諸行のほかに、特にこれを真門自力の念仏として位置づけ、いよいよ信心純化のきびしい実践に挺身したひとが宗祖であった。そうしてこの実践過程の各段階に応ずるそれぞれの教証として措定せられたものが、『大』・『観』・『小』の三経であったと考えられる。既に本願には、十方衆生をよぶに十八・十九・二十の三願をもってする。「往生之業念仏為本」の師教によって、雑行をすてて本願に帰した

宗祖は、ひたすらこの三願の願言を思念せずにはいられなかったに相違ない。三願転入の告白は、廃立為正の師教をきいた宗祖における、この願言思念のきびしい実践のすべてを語るものにほかならない。かくしてここに聞きひらかれたものが、「願海に就いて真あり、仮あり、是を以て仏土に就いて真あり、仮あり」（真仏土巻）という願海真仮の論であり、三願・三経・三機・三往生を主要な内容とする三々法門の綱格であって、それはそのまま『教行信証』一部を支える基底とせられるに至ったのであった。

これによれば、三経は釈尊の言教であるには相違ないけれども、それは根本的には三願の願意にもとづく教説であり、したがって願海に真仮の別が思念せられたごとく、三経にもまたおのずから真仮の異が推求せられることとならざるをえなかったのである。しかるにそもそも三願に真仮の別が思念せられるということは、宗祖が自ら三願転入の実践を通して確かめてきたごとく、「仮の仏土の業因千差なれば、土また千差なるべし」（真仏土巻）というように、個々の宗教的要求に応じてそれぞれの段階にこたえつつ、最後的には選択の願海に入らしめんとする「如来広大の恩徳」（同上）にほかならないのであった。このような三願の中、第十九・第二十の「至心発願欲生」と誓う「修諸功徳之願」、並びに「至心廻向欲生」をもってする「植諸徳本之願」の両願が、個々の宗教的要求にもとづく千差の業因に応ずる願言であり、これによって最後的に導入せられる選択の願海こそ、第十八の「至心信楽欲生」とちかう「念仏往生之願」であった。それゆえにこれを三経についていうならば、『観経』は「修諸功徳」をちかう第十九願を、『阿弥陀経』は「植諸徳本」の第二十願の願意をそれぞれに広説し、最後に『大経』は念仏往生を以て「十方衆生……若不生者」と誓願する、第十八願の願言に基づく釈尊の言教であると聞きひらいたのであった。かくして法然の、三経はともに念仏を選択して旨帰とすると断定した選択廃立論による単一な三経観は、特に信心の体験の場に深く推求せられて、三願の願意にもとづく三経差別という、宗祖の実践的三経論として新らしく展開し、真実之教といえば

第十八願にもとづく『大無量寿経』に限られ、『観』・『小』二経は、それぞれ十九・二十の方便の願意にもとづく方便教にとどまるものとせられることとなった。さればこそ法然の選択本願論は、宗祖に領受せられて単に念仏・諸行の取捨選択にのみとどまらず、釈尊の言教にまで及ぼされて、三経そのものにも権実真仮が弁立せられ、「権をすてて実をとり、仮をさしおきて真をもちひる」（『歎異抄』後序）という、もっとも慎重な聖教謹案の根本姿勢が確立せられることとなったのである。

上にわれわれが宗祖の三経領解は、直接法然によってその方向が決定せられたものといった所以である。

三

以上、われわれは宗祖の三経領解の方法が師教にみちびかれた自然の結果であるとして、これを特に宗祖の独創とみられる三経差別の見解の上にみてきたところである。しかるに法然には本願真仮の考え方はもとより、したがってまた三経差別の立論も認められない。それどころか、本願といえばすべてが第十八念仏往生の願であり、三経といえば全面的に一致して念仏一つを選択することがその旨帰であるとせられたのであるから、いまここにたどりつつある宗祖の三経差別論とは、必ずしも一致するものとはいわれないであろう。なるほど廃立為正の指標は、要門・弘願、方便・真実の取捨選択をきびしく迫るものであることに相違ないけれども、それは念仏・諸善の間における行の廃立にとどまるものであって、三経真仮の批判にまで及ぶものではない。さればこそ『観』・『小』両経の教旨についても『大経』と全く一致して、それは共に念仏一つを選択した真実の教とせられたのであるから、この点、客観的には全く相い撞着するものとしか考えられない。ここにおいて注目せられるものが、宗祖における「顕彰隠密之義」、即ち隠顕釈である。

周知のごとく、隠顕釈は直接には権実真仮あいまじわる『観経』領解の方法として按ぜられた宗祖の独創であって、それは法然が全面的によりどころとした善導の『観経』解釈に対して、法然自身が名づけた「廃立」（『選択集』三輩章）釈をうけて、さらにそれの徹底を期した方法である。しかも単に『観経』のみならず、すすんで『阿弥陀経』にも準用せられている『化身土巻』の重要釈義であることは、この巻の中核をなす三経一心を課題とした二つの問答が、全くこれによって解き明されていること、しかもそれは「信巻」の問答に対応して、ここにおのずから方便化身土の本質を明らかにしていることによって明瞭である。されば宗祖の『観』・『小』二経の解釈、引いてその三経領解については、是非ともこの隠顕釈が注視せらなければならないであろう。これこそ善導に端を発し、法然によって積極的にさし示された廃立為正の釈意をふまえ、これを屈折極りなき宗祖自身の宗教的要求の場にみずから推求して、権実・真仮の錯綜する中からいくたびも廃立を先としつつ、ついに「平等の慈悲」そのものに帰一した、賜わりたる信心にもとづく聖言聞思の結晶であるからである。かくして按ぜられた隠顕釈とは『観経』開説の仏意について、隠・顕両面の二重性を仰推したこの経解読の方法であって、それは何よりも廃立為正の釈意に直接した釈義であること、宗祖自身の言明の如くである（化身土巻要門釈下）。そのなか顕説とは、文字通りこの経に顕著によみとられる表面的・客観的経説をさし、隠説とはそれが「内にあらはす」（「隠彰」の「彰」に附せられた宗祖の左訓、影印本『化身土巻』本四八）隠密の仏意をさす。経はもとより一つの『観経』そのものであることに変りはないけれども、顕説からすればこの経は全面的に定散によって代表せられる諸善を勧励し、諸機各別の三輩三心を要とする自力要門の教を説く経典と理解せられる。したがってそれは権仮方便の経として欣慕浄土の善根を説くほかはない（化身土巻要門釈下）。この経が第十九願の意にもとづくものとせられる所以はここにあるのであって、十九願には〝十方衆生、菩提心を起して諸の功徳を修せよ〟ときびしく要請せられている。それは自らが諸の功徳諸善をなしうるものと、自身を恃むわれわれに

対する要請である。しかるにこの要請に対してわれわれはどこまで応えてゆくことが出来るであろうか。応えきることが出来るか否かは、全く予測の外にある。それゆえに必死に要期せられるものが、「寿終の時に臨んで仮令大衆と囲繞して其の人の前に現ぜずば……」といわれる仏の来迎である。しかもそれとても「仮令」の範囲をいでないものとすれば、この願の領域にとどまるかぎり、われわれは絶えざる不安と憔悴にかりたてられるほかはないであろう。かくしてこの願からやがて信らかに知らしめられることは、「発菩提心修諸功徳」の願言に応えることの出来ない自身の悲しい限界である。「如来異の方便、欣慕浄土の善根」を要とする『観経』顕説はこのような構造をもつものとして理解せられたのであって、ここにこの経の独自性が指摘せられることとなったのである。かくして「如来の異の方便」を説くこの経の顕説は、われわれをして必然的にそれが内にあらわす密意へと導かずにはおかないのであって、ここにききとられたものがこの願の底に流れる無限の願心であり、この経の隠彰の実義である。

隠説からいえばこの経はおよそ次のごとくいわれる。即ちこの経は一切善悪の凡夫に応ずる如来別意の弘願を彰わし、他力の一心を演説した経典であって、経の発端をつげる王舎城の悲劇は浄土興教の機縁をありのままに示すものにほかならない。それゆえに釈迦は出世の本意を説くべき時機がここに熟するをみてすなわち微笑せられたのであるし、韋提の別選によって弥陀大悲の本願はここに開闡せられることとなったのである。それゆえにこの経はまったく『大無量寿経』と内面的に一致して、ただ真実弘願を説く経典と領解せられることとなった。かくして『観経』の構造は完全に隠顕両面の二重性をもつものと領会せられることによって、あきらかにこの経の上に権実真仮の別が批判せられたこととなったのである。それはどこまでも〝廃立を先とせよ〟と示した師教に随順して、十九願の意に即する『観経』の聖言に照らされたとき、そこに自身の限界を悲しまずにはいられなかった宗祖の、この経体読の結果であるといっていいであろう。

されば師教を通して宗祖がこの経に会うたということは、自身が絶望的な虚仮の身と知らしめられたことを意味する。かくしてわれわれは自身の虚仮を知るがゆえに虚仮の自身に応ずる大悲を憶わざるをえないのであるが、されば といってわれわれは果して大悲を大悲として、ありのままにそこに安らぐことが出来るであろうか。何となればわれわれは、自身が虚仮と知ればその虚仮をもって、雑毒と知れば直ちにその雑毒をもってすら、自身を飾らんとはからうからである。経に「疑惑不信」（『大経』下巻）といい、「信罪福」（同上）というものは、即ちこれにほかならない。それはあくことなき自身への信頼であり、とどまることなき我執であるといえるであろう。法然の廃立為正の指標はすでにここまで徹見するが如くである。とするならばこれをうける顕彰隠密の釈義は、単に『観経』の領解にのみとどまるべきではない。それは当然のことながら『阿弥陀経』にも準用せられることとならざるをえないであろう。

『阿弥陀経』は簡結に浄土の荘厳諸相を説いて念仏往生を勧説している。従って一見、そのままにして真実教の地位を保つかのごとくであるし、事実、常にそのように理解せられてきたところである。しかるに宗祖は、特に「一日七日一心不乱」の経説に鋭く注視せざるをえなかった。即ちこの経に教頓機漸といわれる独自な構造をよみとったのであった。従って、隠顕釈が適用せられる部分も、特に機漸の状況に転落するものと認められる経説に限られるのであって、それは「一日七日一心不乱」の経説を中心とする聖言に集中せられてくる。即ちこの経は顕説からいうならば、定散等の諸行を少善根と貶しめ、一日七日の念仏を多善根の善本・徳本と示して、自利の一心を励ます真門の方便教とせられる。いわゆる真門自力念仏の説がこれである。この経が第二十願の願意を背景として開説せられたものとは、このような顕説について指摘したものであることもとよりである。「一日七日一心不乱」の念仏は、一般にそのまま三経の旨帰とせられるところであり、したがって浄土宗の正意そのものと見做されてきたのであるが、ここでは「執持名号」のそのなかに、ひそかにしのびよる定散心・罪福信が鋭く内省せられている。「大小の聖人・一切の

善人、本願の嘉号を以て己が善根と為すが故に、信を生ずること能はず、仏智を了せず。彼の因を建立せることを了知すること能わず。故に報土に入ることなきなり」（化身土巻真門釈下）とは、このような真門自力の失をえぐり出したきびしい批判の言葉である。われわれは既に十九願『観経』において、要門自力の定散法に絶望して、弘願他力の念仏に廻入し終った筈である。にもかかわらず、いままたここでは定散心は再びよみがえって、本願の嘉号を己が善根としてすりかえようとする。二十願が「十方衆生聞我名号係念我国植諸徳本、至心廻向欲生……」等と誓う所以であり、宗祖があくことなき自力執心の強盛を自身に顧みて、「良に傷嗟す可し、深く悲歎す可し」（同上）と悲傷せられる所以である。

しかるにこのような顕説も内面的には真実難信の法を彰わすのであって、それこそ不可思議の本願海を闡わし、弘願の念仏を説いて広大無碍の大信海に帰せしめんとするのである。それゆえにこの経は恒沙の諸仏証誠護念の正意をとく無問自説の経典と領会せられ、したがってこの経もまた『大無量寿経』と全面的に一致するものとせられるのである。

かくしてわれわれは隠顕釈がまさしく廃立為正の師教をうけ、そこに立って思念せられた実践的な経典領解の方法であることを改めて知ることができるであろう。特にこの釈義が三願転入の実践的遍歴の体験をふまえた経典領解であることをおもい、それが全く善導の『観経』解釈を背景とした「廃立を以て正と為す」との師教をうけて、「雑行を棄てて本願に帰」した、宗祖自身の願心思念の全過程の告白そのものであった所以を顧るとき、このことは一層明らかにうなずくことができるであろう。かくしてここに期せずして成り立つものが、「三経の真実は選択本願を宗と為す」（化身土巻要門釈下）三経一致門といわれる方法である。

四

われわれは以上において、宗祖の三経観を明らかにするために、「化身土巻」の中心課題としての『観』・『小』両経にわたる隠顕釈について、極めて簡単ながら概観してきたところであるが、これによって特に指摘せられることは、およそ次のことがらである。

(1) この釈義は上来くりかえしてきたごとく、選択廃立の師教をうけて、信心の実践の場にその徹底を期したものであること。

(2) したがってそれは一つの経説について隠・顕、真・仮の両面から仏意を仰推し、顕説では三経の差別面を明らかにして三経個々の独自性をよみとり、隠説においては三経の内面的一致面をうけとめて「三経の真実は選択本願を宗と為す」とし、それゆえにまた「今三経を按ずるに皆金剛の真心を最要と為す」（化身土巻真門釈下）と結論していること。

(3) されば善導、特に法然が選択廃立ということ一つをもって三経を領解し、それは全く念仏選択というところに旨帰があるとした解釈は、ここでは『観』・『小』両経が内面的に彰わす隠説において領受せられ、三経の真実が特に「選択本願を宗と為す」と結ばれることによって、いよいよ積極的に開顕せられていること。

(4) さらに顕説において三経個々の客観的な差別面を明らかにしたことは、もともと三経が個々にもつ独自性に随って、それぞれの宗教的意義を確かめたものであること。

(5) したがってそれは客観的には法然のそれと矛盾するがごとくでありながら、実は法然のそれを直承しつつ、廃立一途の三経解釈のもつ限界をも突破しえた方法であるとみられること。

(6) かくしてここでは三経は個々に独立した性格をもちつつ、そこに人の宗教的要求の諸段階をみて、最後的にはそれが選択本願に指向し、これに帰一しゆく過程を明確にしていること。

(7) それゆえに顕説の三経差別は差別のための差別ではなく、やがて隠説の弘願に帰一せしめんがための個々の差別であると認められること。

(8) かくして最後的に選択の願海に帰一し終るならば、もはや差別・一致の別をこえて、すべてが仏心の顕現として感戴せられ、われ一人をしてここにあらしむる恩徳の世界がひろびろとひらかれてゆくこと。

等々、大体かくのごとくいうことができるであろう。

われわれはいま、上来をかえりみてこの中特に(8)について一言し、もって本稿を結びたいとおもう。それは宗祖の三経釈の直接根拠とせられた隠顕釈が至りついた最後的領域をあらわすものであって、宗祖の三経領解はもとより、その仏教領受の根本姿勢を明らかにする所以であると考えられるからである。

五

しばしばいうごとく宗祖の三経領解は、法然の明快単一な三経解釈から出た廃立為正の指標に随順するべく、事実において必ずしも単一でない三経、就中『観』・『小』二経の経意を聞くに、顕彰隠密の独創的方法をもってしたところに発想の起点をおくものであった。しかもそれは根本的には十八・十九・二十の三願の願意に三経の経意を聞きひらこうとこころざしたものであった。されば隠顕釈は本質的に師教に聞き、願意に聞くという具体的な信心の実践体験から按ぜられた方法であって、それゆえにそれは指導者の発想というよりは、聞法者の思念聞思を本質とするものというべきである。つまり「往生之業念仏為本」の教示を聞いて、それこそ仏心の動的な現成そのものであることを

自身に領会した「賜わりたる信心」こそ、聞法者親鸞の聖言思念の場であり、それはそのまま隠顕釈発按の場であったのである。かくしてひらかれたこの釈義であればこそ、宗祖の三経領解は二者択一的な廃立取捨の一面的な解釈にとどまらず、常に一文に即して隠顕両面の仏意を仰ぐという方法として成立したものといっていいであろう。即ちここでは能立せられた弘願念仏はもとより、所廃とせられた定散諸善の上にもなおはるかなる仏心を仰ぐという、ふかく、ひろやかな経典領受の眼がひらかれている。それゆえに『観経』の定散も単に廃のために説かれたものとして、一面的に疎外せられるということのみにとどまらず、それが十九願意にもとづく方便要門の体系であることを聞きひらくと共に、そのまま内に真実の仏意を彰わすものとして、改めてそれのもつ宗教的意義がたしかめられることとなったのである。それはただ『観経』だけにとどまらず、念仏為本の浄土宗そのものを説くとのみ解せられてきた『小経』の念仏勧励の文についても、鋭く二十願の意をよみとってこれを真門自力念仏の教として批判すると同時に、その内面深くたたえられた果遂の願心をうけとめたのであった。

かくして宗祖の三経領解を支える隠顕釈は、「如来選択の願心より発起」（信巻別序）した賜わりたる信心を本質として、法然の師教が徹底して思念せられ、個々に独立した三経の一々の上に、一面には経の権実真仮を明らかにしつつ、しかも他面には廃せられ捨てられた権仮そのものの上にも、すでにその内面深く躍動するあたたかな仏心を仰ぎ、権仮自体のもつ内面的意義をうけとめて、最後的には深く如来選択の願心に参入せしめずにはおかないのである。したがってここではただに廃捨や批判のみに終ることなく、所廃そのものをもすすんで包容し摂取してゆかずにはおかないのであって、決して単なる否定や疎外にのみ終るものではない。

このことはさらに宗祖が根本的によりどころとした三願の領解において、十九願の要門『観経』の教旨についても、また二十願の真門『小経』の体系に関しても、上に確かめてきたごとく方便・真実の二重性をひらいて、最後的には

三経ともに選択本願を宗とし、したがって共に同じく信心を最要とするものと示していること、またさらにこの三願のめぐみによって真実にめぐりあえた自身のきびしい求道の遍歴を告白するに当っても、十九・二十の両願の上に遂に真実難思議往生へと転入せしめずばやまぬ仏心の恩徳を戴いて、これを結ぶに「爰に久しく願海に入りて深く仏恩を知れり」と、既に廃捨せられた筈の両願の体系の上にも、それぞれに深厚な仏恩を荷うていることを顧れば、いよいよ明らかとなるであろう。既に『教行信証』そのものが、かくの如き「至徳を報謝せんが為」の感恩の集録であった。「総序」の「遠慶宿縁」の感激はこの書の全巻を貫通して、ここに「恒常に不可思議の徳海を称念」せしめ、「心を弘誓の仏地に樹て、念を難思の法海に流す」（後序）身の慶びを成ずる。ただ深重の仏恩を荷うて「慶喜弥々至り至孝弥々重し」（同上）というほかはない。それゆえに「深く如来の矜哀を知り良に師教の恩厚を仰」（同上）いで、ここに真宗の詮は鈔録せられ、浄土の要は撰われたのであった。

ここに至ればもはや一切がはるかなる恩徳として、今さらすてるべき何ものもない。これを経典についていうならば、そのままでは方便化身土の教とせられる『観』・『小』両経はもとより、大小乗の諸経といえども、すべてが新たな意味をもって『大無量寿経』が開顕する選択本願の世界に包みとられる。それは仏教のほかの外教についても同様である。すべてが我一人をここにあらしむるための深く広い仏恩であったのである。それは師の法然が浄土宗正依の経と選び取った、『浄土三部経』から明らかにした選択廃立の師教にひたすら信順して、「真実之教大無量寿経」に帰し、そこから明らかに聞きとられた宗祖自身の賜わりたる信心の具体相であった。しかしてそれこそ法然が明快にさし示した廃立為正の指標が、最後的にめざした「平等の慈悲」の世界そのものであったのである。